

占星術師が訪れる

マタイによる福音 2:1-12

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さなものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民

イスラエルの牧者となるからである。』」

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

説教

新年おめでとうございます。みなさま、お一人おひとりにとって祝福に満ちた年となりますように。

さて、きょうの朗読をおさらいすると

イエスがベツレヘムでお生まれになった時に、エルサレムに東方の博士たちが星に導かれてやってきた。そうするとヘロデをはじめエルサレムの人たちが非常に動揺して、ヘロデ王は律法学者たちを集めて協議をした。そして博士たちにベツレヘムであることを伝えたので、博士たちは星に導かれてベツレヘムに行って礼拝をして捧げ物をした。そうするとヘロデの元に帰るなという天使のみ告げがあって、博士たちはこっそり帰った。（その後、天使はヨセフとマリアにイエスをつれてエジプトに逃げろと告げ、すかさずヘロデは兵隊を繰り出してその時に生まれたと思われる男の子を皆殺しにした 2:13-18) という話です。

さらっと読んでしまえば、これはただのおとぎ話みたいなもので、イエスの出生のいわれをマタイ福音書を書いた人が自分の信仰の都合のいいように色々なことを並べて（黄金、乳香、没薬の贈り物などなど）つくった物語にすぎない、なんても読めます。でも、はたしてそれだけのことかどうか？いまのわたしたちになんの関係もないことなのか？子どもたちがこの話を聞く時、とっぴな話とは思わず、むしろとても興味を示すでしょう。しかし大人になるとこれは自分には関係のない話だとなってしまう。

一方、これは神の救いが人となって現れたありがたいお話なのだ、きょうは主の公現、エピファネイアの祝日なので、この聖書箇所を読んで、わたしたちは神の救いの神秘をあらためて学ぶのだ、といういわば、キリスト教の正解というか優等生の答えをあらかじめ用意して読むこともできます。さて、わたしたちはどのようにきょうの聖書朗読を聴くことができるのでしょうか。

<東方の博士たち、とはどんな人たちなのか>

・東方とはなにか。ここでいう東方とはイスラエルから見ての東の方ということで当時ではペルシャ、いまの地名でいえばシリア、イラク、イランの方でしょうか。現代の西洋社会中心の世界情勢とは違い、当時は文化的、軍事的に東方のほうが優勢であったと考えられています。東方といえばヘロデよりも権威をもっているということです。

・博士とはなにか。博士と翻訳されていますが、聖書ギリシア語辞書によれば①魔法使い・魔術師 ②占星術師・賢者（博士）とあります。博士という翻訳で間違っていないのですが、間違っていないだけで正しくはないような気がします。博士という日本語では学者先生、大学の教授という連想になることが多いとおもいます。どうも博士ではニュアンスは違う。この東方からの人たちに対比して、ヘロデが博士たちの突然の訪問にうろたえて集めた人たち「王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて」のほうがニュアンスとしてはもっと博士らしいような気がします。いまの日本でも、ややこしい時事問題がおきると総理大臣（日本のいわば王です）が有識者たち（たいていは大学の教授・大先生です）を集めて有識者会議でその問題を協議します。協議の内容は原発とか安保など反対意見の多いものです。その会議ではたいてい総理大臣の気に入った結論が有識者たちの協議結果となります。こう解釈するとヘロデ王会議の出席者と東方の星占いたち（博士と翻訳するのは？）の違いがはっきりしてくると思います。

さて、わたしたちキリスト教を信じる信仰者はときとしてイエス・キリストが神であるということを強調しすぎて、イエスが父と呼ぶ神のことをなおざりにしてしまう傾向があります。神＝イエス・キリストになってしまう。三位一体の神という教えを忘れてしまいます。とくに福音主義と自称するキリスト教信仰者に多くみられる傾向です。きょうの聖書朗読の直後の箇所にはヨセフ・マリアの夫婦はイエスを連れてエジプトに逃げたとあり、ヘロデは

博士たちに裏切られたと知るや否や、ベツレヘムとその周辺にいる2歳以下の男の子を皆殺しにした、とあります。人として生まれたイエスはまったくヘロデに対して対抗手段をもたず、ただ恐れて逃げ隠れするしかすべがなかったのです。これもふくめて（折込済みで）の神（イエスの御父）のご計画であったとキリスト教は解釈します。

<叙唱から>

**あなたは御子キリストを遣わし、諸国の民に救いの神秘を示してくださいました。
キリストは死に定められた人間の姿をもって現れ、わたしたちを不死のいのちに呼びもどされます。**

これはきょう感謝の典礼で唱える叙唱の一部分です。あえて解説すればこうなります。冒頭の「あなた」とは「神」をさします。東方の星占い師たちがイエス誕生に気づいた（星に導かれた）という内容が「諸国の民に救いの神秘を示された」ということです。諸国の代表というか「東方」は比喩的に表現されています。イエス一家がエジプトに逃げたということは「死に定められた人間の姿」と唱えられています。そしてイエスの一生をとおして「わたしたちを不死のいのちに呼びもどされます」ということを感謝とともにお祈りします。

イエスが無為の人としてお生まれになった、そしてそれが神の救いの神秘であった、この信仰を通して読む、きょうの聖書朗読はけっしておとぎ話ではなく、真実であり、それは真理の物語となります。
